

---

# BOSSの、とある惑星での日常

星野 零(Elwing)

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

BOSSの、とある惑星での日常

### 【ノード】

N21280

### 【作者】

星野 霧（E1win）

### 【あらすじ】

えー。抹茶小豆さんの活動報告を荒らしまくった上に、出来たのが、こんな訳の分からぬものでした。タイトルには野球の字も入りませんでした。野球、中には出ではきますけど、テーマじゃないですねえ…。

なんだか、口元がドライのつもりで、徹し切れてない。ちょっと半端なお話かなあ…。ミスター・ジョーンズ、あの味のある雰囲気を出せたでしょうか？ 難しいですね…。

まあ、タイトルどおり、日常の風景、そんな感じだと思います。

よりしへお願こしま。

この惑星の住人は、野球、というものに取り付かれているようだ。

私はジョーンズ。 宇宙人だ。

これまでには、運送屋、量販店、カラオケ屋、ホスト、ちらし配り、などなど、時には選挙に出て知事までやってしまった事もあった。

とにかく、この惑星のことを調べてきた。

そして、判った事の一つが、これ。

どうも、この惑星の住人は、野球、というのが大好きのようだ。最近はサッカーなどというのも人気を伸ばしているが、まだまだ、野球人気には及ばないようだ。

一度は帰還命令が出て、この惑星を離れたが…、  
が、また帰つて来てしまった。

今は、下町の豆腐屋に住み込みで丁稚奉公している。

この、豆腐、というものは実に面白い。 味が無い様で、実は実に味わい深い、実に奥が深い食品だ。 だが、そう言える様な素晴らしい出来の一品に出会う事はやはり珍しいが…。

それでも、一度、その味に出会つてしまふと、取り付かれてしまう。

最近自分でも気が付いたが、私は結構凝り性のようだ。

そして、この豆腐屋の、親父さんの作る豆腐は、いつでも、かなり美味しい豆腐になつていて。 お値段もお手ごろで、最近のスーパーの訳のわからない安売りで、一丁十円だとか二十円だとか、そんな値段と比べられたら敵わないが、絶対にこの味でこの値段ならお

得なはずだ。

そう。こここの美味しい豆腐はイチキユッパだ。

話が逸れてしまった。

そう、野球だ。

どうしてだろ？

夜になると、この豆腐屋の主人もナイター中継にかじりつく。ジヨツキでビールをあおりながら、自分で作った豆腐をつつく。ひいきのチームが勝っていると、豆腐もおいしく感じるらしいが、負けていると、どんな豆腐でも味がおかしく感じるらしい。まあ、そんな時は訳もなく怒り出してしまって、豆腐の味のこと等は頭の中から消えているかもしれないのだが…。

そんな親父さんの様子は、私としては不思議ではあつたけれど、所詮は他人事だった。

そして昼間は、とくに。

私を相手に豆腐の仕込みをしながら、ひいきのプロ野球チームの選手に関する蘊蓄を延々と話し続ける。それは愚痴の様であり、自慢の様でもあり、どちらにしても、親父さんのそのチームへの、そしてチームの選手達に対する思いいれの深さを感じられた。

私としては、知りもしない人たちの事を延々と聞かされ続けるので、訳がわからなかつた。だから、最初は聞き流していたのだが、ある時「それで、その人はその後どうしたんですか？」と訊いてしまつた。確かに、とある野手が思いもしないエラーをして、結果として、そのチームはその日の試合に負けてしまつたって話だつたと思う。

それからは、私も一緒にナイター中継を見るようになつていつた。私が思わず訊いてしまつた、その選手が元気にプレーしているの

を見て、私も思わず和んでしまった。『気がついたら、親父さんと一緒に中継を見ながら、試合の進行に一喜一憂していた。

そして、チームの勝利に、親父さんと乾杯して喜んだ。

いつしか、それが私の日常になつていった。

が、それだけでは終わらないのが、この惑星の予測できない展開だ。

ある日、親父さんが唐突に言い出した。

「おう、ジョーンズ。おめえ、野球やらないか」

私が不思議そうな顔で、無口のまま見返していると、親父さんは構わず言葉を続けた。

「実はな、この商店街で草野球チームを作るこになつたんだよ。わしは、四番サードだ」

その後も、親父さんの一方的な話は続いた。それによると、既に私の参加は決まっている事のようだ、私はピッチャーという事になつている様だ。

そして、今度の日曜日に知り合ひの商店街チームと試合をする事も、既に決まつている様だつた。

まあ、多少でも野球を知つた今、ピッチャーと言われて、嫌な気がするわけもなく、ピッチャーで、一ヒルで無口な私なら、きっとモテル…。そんな事を妄想しながら、それでも、にやつかないよう、に、きわめて無表情で週末を待つことになつた。

そう。そして、その日以来、毎晩のように親父さんとキャッチボールをする、そんな事が私の新たな日課になつた。

試合当日、お約束のようすに晴れ渡つた空を仰ぎながら、我々の商店街チームは近くの川原のグラウンドに集合していた。

もちろん、我々のチーム名は『ボス』だ。

対戦相手のチームは親父さんの知り合いの商店街、との事だったが、そのチーム名は『エメラルドマウンテン』という事だった。

さらに、よく見ると私の知り合いが混じっている事が判明した。同じく宇宙人のデーブ、そして、ゆうこりんまで…。

「戻ることないじゃん」「あ～ん、もどつてきちゃいました～」などと言いながら、キャッチボールをしていた。

結局、彼らもこの惑星に戻ってきた様だ。

やがて

「プレイボール」

そう宣言された。

そして、いざ始まつた試合の方は、とうとう彼らのチームも我々な内容だった。

私は、といふと、あのピッチャーマウンドから見ると、ストライクゾーンが如何に狭いのか、その中に入る様にボールを投げる、といふのが如何に難しいのか、そして打席に立つて、バットを振るのはいいけれど、どうにも、飛んでくるあの小さなボールに、そのバットを当てる、といふ事が如何に難しい技なのか、そんな事を感じていた。

どうやら、それは親父さんも一緒に、ゴロをトンネルしたり、せっかく捕つたボールを送球する時にとんでもない方向に送球したり、と、大エラー大会になつていた。

まあ、それは相手チームも含めて、誰もがそう変わらなかつたのだが…。

相手チームでは、デーブは必死にバットを振り回し、ボールが飛

ぶと死に物狂いで走っていた。ゆうこりんも、口では「あ～ん」などと言いながらも、目は真剣で、必死に飛んできたボールを追いかけ、それを手にすると、一生懸命に投げ返していた。とにかく、二人とも普段以上に真面目で、そして、とても楽しそうにしていた。

とにかく、そんな状態で、野球のルールはきちんと覚えていたはずだったけど、そのルールを、この試合に適用する、という事がだんだん困難になつていつた。

というか、そんな細かいことを考える事がめんどくさくなつていつた。

いつの間にか、スリーアウトでチョンジ、という最も基本的なルールさえ曖昧になり「もう、疲れたからチョンジ」とか「そろそろピッチャーやりたいからチョンジ」とうとう「もう、攻撃飽きたからチョンジ」なんて事になつていつた。

だから、スコアボードに並んだ得点の表示が何を表しているのか、それは謎の数字だった。

それでも、みんな一つのボールを追いかけて、それを投げ、ぼうつきで叩き、それをまた追いかけて、そのボールを持って、相手を追いかける。それはもう、別の競技だったのだろう。

いや、競技ですらなかつたかもしれない。

それでも、とにかく、皆そんぶんに楽しんだ事は間違いなかつた。夕暮れになり、スコアボードに意味不明の数字がもう書き切れなくなつたころ、我々も、相手チームも、疲れ果てて、そして満足していた。

試合結果は、32768対32767で『約』引き分け、という結果に決まった。

まあ、その結果が合つてているのかどうか判らないし、そもそも、

スコアが何を表しているのか不明だし、むらに言えば、どちらのスコアがどっちのチームのものか判らなかつた。

だから、正しくは『不明』だつた。

けど、やはり、そんな細かい事は誰も気にしなかつた。

そして、その後は、両チーム合同の宴会へとなだれ込んで行つた。近くの赤提灯にみんなでなだれ込み、ちょうど始まつたナイター中継に盛り上がつた。

ひいきのチームはお互にバラバラで、中継を見ながら歓声を上げる人、罵声を張り上げる人、そんな叫び声が交錯して異様な空間を作り出していたかもしれない。

けど、その日一日を、一緒に野球もどきをして遊んだ仲間の我々は、そんなひいきチームの違ひなんていう些細な事はだんだんと気にならなくなつていつた。

赤提灯のあとは、みんなで屋台のラーメンを食べて、カラオケに向かつた。ほとんど誰も脱落しなかつたので、屋台は行列になつたし大変な状態だつた。

カラオケは、それまで私はただの騒音だと感じていたが（八代亞紀は別だ）、一緒に歌つてみると、けつこうにいものかもしれない。なんて思い始めていた。

私が熱唱したのは、もちろん八代亞紀の『舟歌』だ。

みんなで一緒になつて声を張り上げてゐるうちに、時間を忘れた。

疲れ果て、やつとカラオケボックスから出てきた時、既に東の空が白み始めていた。

けど、誰の顔も妙に爽やかだつた。徹夜明けのドロドロとした感じは全くなかった。寝不足など、これから寝ればいいじゃないか、

そんな感じだつた。

この後の、少なくとも半日を無駄にしてしまつ。それは、以前だつたら受け入れ難いだらしないことだつた。

今でも、それがろくでもないことだ、といつ思いはあつた。

けど、そのろくでもないことが、その次へと向かつ氣力を作り出している様にも感じた。そう、また同じ様にろくでもないことをする為に、その為にまた日常をしつかりと生きてこいつ、そんな氣力が満ちてくるように感じた。

ああ、やはり、この惑星の夜明けは美しい。

でも、私はこの惑星にすっかり馴染んでしまつたのかもしだい。

このままでもない、すばらしき世界に…。

(後書き)

このお話を書いている時にちょっと検索して、こんなのが見つけました。

http://www.youtube.com/results?  
search\_query=tommy+lee+jones+  
tv+commercial&aq=f  
うーん。いいんでしょうか？まあ、CMだから、文句は出ないかなあ？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2128o/>

---

BOSSの、とある惑星での日常

2010年10月12日13時49分発行